他自主義の計

幻の詩集『社会主義の詩』

の連は、 は昭和のプロレタリア詩をしのぐほどである。たとえば、幸徳秋水の「赤色旗」(漢詩)の最後 けられた作曲も収録されて、 アンソロジー 『社会主義の詩』には、 今日の詩集の概念にははまりにくいが、その詩のはげしい息吹き 新体詩、漢詩、短歌のほかに俳句もあり、新体詩につ

五元本の内で、五本本の内で、五本本の

空前あるいは絶後、同時に全作品の反戦と反逆の息吹きに、 孤剣 るが菊半截のこの小冊子は相ついで刊行された『普選の話』(西川)、 の方がはるかに大きい。このように社会主義実践のメンバーによって詩集が編まれ たこと は とうたっている。 この詩集に加わったのは幸徳、 その中で詩人の名あるは山口孤剣ひとり、 (その他匿名数氏) アレクサンダー らで、 ことごとく日露役非戦運動の拠点平民社にかかわる人たちであ 木下のほかに堺利彦、 二世暗殺の事実に託した反逆の思いであろう。 その彼とて社会主義伝道者としての足跡と名声 原霞外、 発禁は予想されたことかとも思え 中里介山、 『理想郷』(堺)、 西川光次郎、 『社会 山口

ている。 由文社、 日発行、 たのである。 などとともに、 主義の話』(堺)、 奥付は、 このたった三五頁、 編集兼発行人堺利彦、 東京市麴町区元園町一丁目十七番地、 明治三十九年四月八日印刷、 主義伝道のためのものでもあっ 『小供の社会主義』(深尾韶) 文庫版型の小詩集 価五銭、 となっ 同十

53

の目次は次の通り。

巣鴨の歌 乱調激韵 自然の潮流 秋水兄を迎ふる歌 赤色旗 戦争の歌 獄中の音楽 血染の赤旗 ラサール 我が行く道 血祭 富の鎖(曲譜付) ポンポコ歌 別荘と公園 (曲譜付) (曲譜付) 幸徳 秋水 堺 利彦 山口孤剣 西川光次郎 某氏作 武蔵野守 木下 木下 一読者 中里 介山 名氏 尚江 二六 二四 \equiv 一九 一七 五 Ξ 0

また巻頭のはしがきにはこう書いてある。

「社会主義は如何なる人にも伝へなければならぬ。社会主義わ、どんな階級、どんな種類、ど 懐、かかる音楽詩歌の趣味を有し得るに於て、決して人後に落ちぬことを示すであろう。 娯楽、修養等を決して度外にすることわ出来ない。此書、小なりと雖も、我が 同 志 の 所 んな職業にも侵入しなければならぬ。長き、不撓の戦いを続けんが為にわ、人並の交際、 三十九年三月 由文社同人

やりました。作者にわ誠に申訳ないことで。(深尾韶しるす)」 ちょっとお断りしておきます。此本の仮名遣いは少し考へあって、わざと突飛な大改革を

あったといってもいい。その他社会主義者に向けてその活動を激励するなどのものもあり、 めを考慮した、明治の社会主義啓蒙期の彼らの気構えがここに見出される。無名氏が寄せた いた婦人たちの歌うのをきいたが、集会などで昔はひろく歌われたものであったらしい。 「富の鎖」は曲譜とともに収められており、それを昭和三十二年秋の石川三四郎追悼集会で老 「ラサール」、某氏作の「血染の赤旗」などは、昭和の戦う詩の先駆ともいえるものであろう。 平民社の活動から生れ出た詩集であっただけに、全体を貫くものは反軍非戦の慷慨のうたで 木下尚江の「ボンポコ歌」は、添田啞蝉坊らの演歌そのままの社会諷刺であり、無名氏の 読みやすく書きやすいものに改むべきだというこの主張と、同時に文字不十分の人びとのた 国の為なり、

君の為なり。

集『社会主義の詩』を代表するものであった。 新体詩人としても名のあった山口孤剣や木下尚江の作以上に、中里介山の「乱調激韵」は詩 中作とおもわれる小詩や短歌もある。

国の為なり、君の為なり。 動物、神を引く、我がうない子。 のを表して、我がうない子。 のを表して、我がうない子。 を表して、我がうない子。 を表して、我がうない子。 を表して、我がうない子。 を表して、我がうない子。 ののののののが、 ののののののではのが、 のののののではのが、 のののののではのが、 のののののではのが、 のののののではのが、 のののののではのが、 のののののではのが、 ののののではのが、 ののののではのが、 ののののではのが、 ののののではのが、 ののののではのが、 ののののではのが、 ののののではのが、 ののののではのが、 ののののではのが、 のののではのが、 のののではのが、 ののののではのが、 のののではのが、 のののではのが、 のののではのが、 のののではのが、 のののではのが、 のののでは、 ののでは、 ののでは、

顧ば、暫し其『万才』の声を止めよ。 さらばよ、我が鋤洗いし小川。 ならばよ、我が鋤洗いし小川。

国の為なり、君の為なり。
其の異様なる叫びに汚れん。
我豊憤らんや、
死出の人を送る。

表 孫 煙波三千里、 素 孫 煙波三千里、 東、郷関を顧みて我が腸断つ。 西、前途を望めば夏雲累々。 一夜、 舷 を叩いて月に対す、 一夜、 舷 を叩いて月に対す、 あー我、怯なりき、 あー我、怯なりき、 あー我、怯なりき、

国の為なり、君の為なり。 国の為なり、君の為なり。

ショ きたい。この詩が、その漢詩調であることの古めかしさにもかかわらず、なかなかにインタナ 写と叙述を受けて、 べきの義務ありや」と高潮する反戦の声は、満目の伏屍、夕陽をうけて暗憺悲惨なる戦場の描 この詩をわが明治・大正・昭和の歴史の中において見、考えるために二つのことを書いてお ナルな感情を保持していることである。 発せられている。 ここにナショナルな日本的立場を超えたものがある。 「人、人を殺さしむるの権威ありや。人、人を殺す

聞』に発表されたということである もう一つのことは、 与謝野晶子の有名な反戦詩が書かれる以前に、 この 詩 が週刊『平民新

発禁の厄にあったのは当時として覚悟の上のことであったかもしれない。 れにつづく『直言』に掲載されたものであることを思えば、これらの内容と併せてこの詩集が 義運動の中でひろくうたわれた「富の鎖」が一読者の作として、その音譜とともに収録されて 西川光次郎の短歌とともに愛誦にふさわしいものであり、また明治から大正にかけて、社会主 いることは前に述べたが、しかもここに集められた詩が明治三十六年創刊の『平民新聞』やそ この他、山口孤剣の「秋水兄を迎ふる歌」や無名氏の「自然の潮流」等の抒情的な新体詩は

もしれないが、また文学史家たちの怠慢でもあろう。 詩辞典』(北辰堂)その他の詩の辞書類や『現代日本詩史』(遠地輝武)、『日本プロレタリア文学 大系』等のいずれにも記載されていないのは、幻の詩集、とまでいわれた稀有の事実のためか との詩集『社会主義の詩』のことが不思議と戦後の『世界現代詩辞典』(創元社)、『日本現代

短歌のなかに なお巻末には目次にない六首の短歌と、「ミレーの画に題す」という詩一篇が巻末欄外にあ 白雨星」という署名がある。この詩集のための読者の投稿であろうか。またその

絵筆折りてゴルキーの手をとらんにわあまりに細き我腕かな

という、後の大正の歌麿竹久夢二の一首がある。

(付言) 絶えて久しく、 いたこの詩集も、 って復刻され、その実相が知られることとなった。 昭和四十三年一月に高知県南国市の土佐文化資料調査研究会の手によ 幻の詩集といわれて、その刊行の事実までをうたがわれるに至 っ

庶民の心意気『俗体詩』

『俗体詩』は、『社会主義詩集』と『社会主義の詩』などにつづく明治三十年代の発禁詩集であ を嗅ぎもとめ、処断に汲々たるものであったかを、今に証するものといえるだろう。 あったかを物語るとともに一冊の本の内容の検討をなおざりにして、ひたすら社会主義的臭気 あるいはそれにつらなる取締者が、官僚的に上に向って細心万端、下に向って圧制の理不尽で る。この詩集の発禁こそ、ひたすら社会主義思想弾圧のための発禁で、いかに時の日本政府、 『社会主義の詩』から三ケ月後の明治三十九年七月に堺枯川序、岩本無縫編著で 刊 行 した

ことである。堺はその得意とする洒脱な筆づかいで て探し求むればこの詩集の発禁理由は、堺利彦の序文にあったかもしれぬという程度の

「世に神様の頻々として出現する時、社会党は平然として衣食住の問題を論じて居る。世に

対して、 天才主義の流行する時、 社会党の詩人が俗体詩を吟ずるは、実に当然の事である。 社会党中には凡人社を起す者がある。されば世のハイカラ新体詩に

社会党の心意気を知るべきである。」 社会党は俗体詩の作者たる二子を有するを以て誇とすべく、世人は二子の俗体詩に依っ て可ならざるはなきの有様である。 無縫の二子、其の才の発する所、 俗体詩の如き、亦た只だ其の妙技の一である。 或は演劇となり、或は講談となり、 殆んど往くと

な趣きが感じられ、「社会党の凡俗人」を自称する堺利彦における社会主義者としての自負、 なりし昭和初めのエスプリ・ヌウボオ、 と自称することのなかにあったのではないか、とも考えられる。 ひいてはバタ臭さを拭いきれない新らしい芸術と詩の非庶民性への反撥が、 と書いた序文のなかの、神様の出現、 いわれわれのよく知るところではないが「新体詩に対して俗体詩」の一言は、 天才主義の流行、凡人社等々のことは、 輸入のモダン派に対するプロレタリア生活詩派のよう 敢えて「俗体詩」 後年、 当時の世情に遠 文運盛ん

示するかのようである。 反民族的 社会党の心意気を知るべきである」とその序文を結んだあたり、ヤボな西洋かぶれ、反日本的で 「社会党は俗体詩の作者たる二子を有するを以て誇とすべく、世人は二子の俗体詩に依って と見られがちな社会主義が、江戸以来の、洒脱で庶民的な心意気をもっていることを誇 わざと『俗体詩』と誇称したことの意味もその辺にもとめられよう。

人であるが、 との詩集の編者の一人原霞外は『社会主義の詩』にも加わっていた当時の社会主義詩人の一 彼の本領は俗謡調を駆使して社会主義的正義感を盛りこむところにあった。

貧ゆえと思へばあはれ泥棒を

探す役目も貧からと

思へばつらし雪の夜を

外套一と重に身をつつみ

寒さにとほるサーベルの

柄の間眠る時も無く

軒端の犬を友の身の

家には嘸(さぞ)や女房が

吾身案じて独り寝の

煎餅蒲団はなほ寒からふ

皮肉な哀調があり、 「質ゆえ」という原霞外のこの詩は、貧者同志が人民対警官として相対する世相にふれつつ、 もう一人の編者岩本無縫の「わたしゃ穢多の子、世に嫌はれて」とうたい

のに挑んだ唄として、 す「穢多の娘」は、 ほとんど歴史的なものであろう。 俗謡調がとらえた、古くして現在なおわが国の深刻な社会問題であるも

の本を遭遇させた一因かとも思われる。 えて時代の制約もあろうが、 もちろん二人の作品が、多く俗体俗謡で文学的に低かったことには、二人の 『社会主義詩集』や『社会主義の詩』の発禁が、 詩人的資質に かかる運命に 加

逸すべからざる性格といえるだろう。 衆の生活を伝統的な庶民の気概によって歌おうとしたところが見える。この気概がこの詩集の のか、秋の嵐が吹く度毎に、思い出すぞやみじめな浮世。」には、"俗体詩"を誇称しながら民 の、泣くに泣かれぬあはれを思へ。庭の朝顔あだむらさきの、咲かずに散らしてならりょうも つ、"あだむらさき"の「父をたすけて十八年を、朝に夕に提灯張りの、ずっとこらゆる胸の火 者岩本無縫について知ることができないが、彼が「序のかわりに」としてかいている 中の 一 寄せているが、まず同工異曲、あくまで俗体詩推進者たちの集団の観がある。 なお、この詩集は霞外、無縫二人のほかに「江戸むらさき」の章に五人の詩人が一篇ずつを 私はまだこの編

『俗体詩』の目次は、

梵天帯

三篇

岩本 無縫

63

故郷百女 一二篇

五篇

岩本 無縫

五

七篇 原 霞外

浅草海苔 江戸むらさき

であった。このうち、 の五人がかいている。 「江戸むらさき」の五篇を鉛鉄迂人、 山の子、中村秋湖、 北山槿雨、

この詩集が忘れられて今日に至った理由の一半はそこにもあったであろう。 の時代に先駆するほどの理想主義を内に秘めたと思われるような明るさはなかった。 『俗体詩』と自ら称したにふさわしく作品はすべて俗謡調で、定形詩的ではあっても新体詩

どんぶりにうごめくはとったばかりの それ承知もとより合点 生きた銀よ 年越し着物持たぬが何で恥だ 布子典したら嬶アがわめく 鰹ウ鰹ウ

何の汝らに此味がわかるものか 江戸ッ子は此面が先づ第一の宝物さ

(初松魚・中村秋湖)

見ればおぬしは年若な 俺と二人で食ったのも 死んだ息子と瓜二つ 似るともようも似たものよ 瓜盗人よ待てしばし

(瓜盗人・北山槿雨)

こんな月夜の晩じゃった

(略)

混淆こそが詩集『俗体詩』の時代を背負った多であったのである。 をうたったことや原霞外が「一蚤もせせれば寝もやすからで、聞くは浅草あけのかね、又も昔 責の笞のもとに、つらい労働の今日も来た、あの監督の意地わるさ、技手の髭面にくらしい」 の詞をもつ「機織歌(工女が歌へる)」をうたっていることは、殊更な異質ではなく、これらの この意気がって幼いところには愛嬌があり、それが必然的な古さというべきものでもあった その中で「権八小紫」「落人姿」「浦里時二郎」をかいた岩本無縫が冒頭に「穢多の娘」

65

文ももとのとおりであった。 語・江戸むらさき』と改めて再発行され、今度は禁止にならなかったという。 おもしろいことに、発行すぐ発禁となったこの詩集は五カ月後の同年十一月、名を『詩的俗 もちろん序も本

66

この詩集『俗体詩』のことも詩史や詩辞典に今日まで記載されることがなかった。

『荒村遺稿』の非妥協精神

見を加えつつ、詩人荒村の遺著の発禁について触れたい。 その中に詩が少く、評論その他が主要部分を占めているということである。このような訂正意 私が数年前に連載した「発禁詩集」の第十一番目に松岡荒村の『荒村遺稿』をとりあげたの いささか行きすぎでなかったとはいえない。それは『荒村遺稿』が詩集というべく余りに

遭った。編者の一人白柳秀湖が、巻初に、 三十年代社会主義運動のなかの代表的詩人ともいうべき彼の死は明治三十七年七月のこと、友 へらの追慕とともに編まれた 『荒村遺稿』は、 戦後に書かれた詩史、詩辞典の類は、ほとんど松岡荒村のことを逸しているようだが、 死から一年後に刊行されてすぐ発売禁止の厄に

「君が京都同志社の学窓にあるや、バイロン、シェレー、キーツの跡を追慕し、 茲に深く革命

当時西欧の天地に澎湃せる新思想の驚くべき暗流となりて、我岸を洗ふあり、 して沈痛悲壮の弁は、その舌端より奔溢して――君が東都に上り、稲門に学ぶや、時恰かも 天に号哭して、奸吏の非道を怨嗟するの声を聴き、義憤心頭に発し、西都に帰るや、 て君は実に社会主義思想に触れたりしなり。」 日清戦役の後を承け内には幾多の社会問題の弥漫して、革新的機運の鬱勃たるあり、外には にするや憤然として蹶起し、ひとり渡良瀬の河畔に沿い、白葦黄茅の中に、幾多の窮民が皇 野を分けて至る所無告の孤児に慟哭し冷酷氷の如き社会の同情を要求せり、 史の初夏を彩なされけむ、 の泉を掬めり、嵐峡の春、 紅恨紫愁の胸を抱いて濃美育児院に投じ、南船北馬、遠く北奥の 嵯峨野の秋、此間君はいかなる波瀾曲折を以ってそのうら若き歴 君鉱毒問題を耳 噫此間にあり 忽ちに



な激しい詩をかいたのは、後に昭和の左翼詩人のなかの三十ほどの詩は、ほとんど七五調の新体詩であるが、反逆の詩心のおもむくままに、「残詩の世に寄する歌」のように文語調ながらの自由達の世に寄する歌」のように文語調ながらの自由と書いて、ロマンティックな熱血児の生来の行動と書いて、ロマンティックな熱血児の生来の行動

イデオロギーに先行されつつプロレタリア詩をかいた事情とよく似た現象といえよう。

衆を尊しとする社会主義の裏打ちによってこそ成立したもの、と読む者の目を見張らせずには おかぬだろう。 〇行におよぶ作品は長詩の体裁を生かしきり、時流に先んじた写実性と抒情性とに加えて、民 の物価なども記しつつ、俳句、新体詩、自由詩、散文、対話等をもって綴っている。一篇一四 かにそれを超える自在さで、日記風に、また紀行風に、過ぎゆく土地土地の風物を写し、毎日 この本の巻末近くにある「帰郷旅の記」は蕪村の「春風馬堤曲」を思わせる手法だが、はる

が貧窮問答の歌を読む」は、明治三十年にあって現在の日本に向けるかのごとき批評性をいま荒村は評論に逸すべからざるものを残しているが、特に「国歌としての君が代」「山上憶良 葉集中此歌を取除くの英断を敢て仕得るか――」と言い放っている。 吾人と同様の声をふるひあげて、大いに汝等の没道を弾劾しつつありけると、識れよ。かつて なお失っていない。特に後者は「万葉の快楽詩人」と題して大伴旅人を論じたものと とも に は渡良瀬の哀歌を禁じ、今又吾人を圧せんとする者よ、汝等果して、故人憶良が骸を刑して万 「万葉」への造詣を示すばかりでなく、憶良を鑑賞してその最後に「頑迷の徒よ、汝の祖先は

反逆的に対立する者の意志表示であった。 また、いうまでもなく「国歌君が代」を彼の立場から論ずることは、日本帝国の国家権力と 『荒村遺稿』の発禁は詩と散文にわたる詩人荒村

非妥協精神によるものだが、彼は児玉花外につぐ明治二人目の発禁詩人であった。